



書  
評

## ENT 臨床フロンティア 実戦的耳鼻咽喉科検査法

小林俊光編 東北大学医学部耳鼻咽喉・頭頸部外科学教室教授

B5 判 並製 312 頁 定価 (本体 13,000 円 + 税)

[ISBN : 978-4-521-73459-0] 中山書店刊

〒113-8666 東京都文京区白山 1-25-14

TEL 03-3813-1100 (代表) 振替 00130-5-196565

<http://www.nakayamashoten.co.jp/>

<書評者> 高橋 姿 (新潟大学医学部耳鼻咽喉科学教室教授)



本書『実戦的耳鼻咽喉科検査法』は、タイトルが示す通りの、まさに実戦的な仕様になった書籍である。一口に耳鼻咽喉科検査法と言っても、耳鼻咽喉科・頭頸部外科で扱う臓器・組織は多彩であり、聴覚・平衡・嗅覚の感覚器から鼻腔・咽頭の呼吸器、口腔・咽頭・喉頭・気管へ続く消化器がある。さらには顔面神経、三叉神経、舌咽・舌下神経などの脳神経、唾液腺や甲状腺ならびに頸部の疾患も対象となる。それらのすべての領域の検査法を網羅した成書は多数あるが、非常に厚くて重いものや、分冊となって取り扱いも不便であり、多忙な日常診療にあっては実用的な書物とは言いがたい。

専門編集者の小林俊光教授は、「序」において、「超多忙な耳鼻咽喉科開業医や第一線の勤務医の先生方に役立つ」ために、「①手間暇がかからず、②大がかりな装備を必要とせず、③被検者の負担も少ない検査法に重点を」置いたと記している。その結果、数多の検査法の中から絞り込まれた項目が、従来とは異なる序列に記載されることになったと思われる。検査法の選択には、単に臨床現場での使用頻度だけでなく、鑑別診断における重要性も加味されている。

気づいた点を列挙する。まず、第 1 章が CT, MRI の画像診断から始まり、複雑といわれる耳鼻咽喉科領域の正常解剖を解説している。次いで X 線検査、さらに内視鏡診断に続く。また、内視鏡診断では「良性疾患、とくに小児における利用法」として、検査時に協力が得られづらい、正確な所見を取るのが困難な小児の内視鏡検査法を単独に取り上げている。

耳管機能検査の良否は、鼓室形成術の成否を左右するほど重要である。しかし、従来はそれほど大きく扱

われることはなかった。本書では、鼓膜形成術の術前検査としての耳管機能検査を詳しく解説し、耳科手術への適応の考え方を具体的に述べている。

第 5 章の聴覚機能では、古典的な音叉による検査法も取り上げ、その意義を改めて解説している。また、従来は開業医があまり行っていない OAE, ABR, ASSR, アブミ骨筋反射検査の他覚的聴力検査を取り上げ、その実施を促している。耳鳴検査法では検査法のみならず、TRT などの治療法まで言及している。また、検査法の説明だけでなく、検査法の組み合わせによる感音難聴の鑑別診断法も興味深い。

第 10 章の「呼吸機能をみる」では、耳鼻咽喉科固有の鼻腔通気度、睡眠時呼吸障害に加えて、主に内科医が扱う呼吸機能検査も取り上げ、上気道から下気道まで気道全体の呼吸機能の理解を促している。

それぞれの項目ごとに、単に検査法の記載に留まらず、検査の結果得られる異常所見の読み方、鑑別疾患、さらには治療法にまで言及していきめ細かい。どの項目でもイラストや写真が多用されていてわかりやすい。さらに、欄外にその項のまとめや豆知識といった一言メモがあり、読む者の理解を助ける工夫が随所にある。まさに実戦的である。

さらに、本書においてはいろいろなところにコラムやアドバイスの記事が書かれていて、それが非常に有用である。コラムでは、新しい疾患概念 (auditory neuropathy) や検査 (ASSR を理解する)、検査機器紹介 (知っておきたいオプションのめまい検査法)、診療のコツ (機能性難聴の検査と心因性難聴診断のコツ) などが、わかりやすい読み物として掲載されている。これらのアドバイスやコラムを、診療時間外に、時間に

余裕ができた時に拾い読みすることで、耳鼻咽喉科検査法の最新情報を知ることができる。日常臨床における知識が広がることは必至である。

最後に、付録として「患者への説明用イラスト集」があり、患者さんに理解しやすい図が多数掲載されている。検査結果の説明の際に、ここにあるイラストを

コピーし、説明内容を追記しながら説明に用いれば、患者さんへのインフォームドコンセントの助けになり、良質な医療の実践にもつながる。

多くの耳鼻咽喉科専門医に本書の活用をお奨めしたい。